九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ビスマルクの性格

長，壽吉

https://doi.org/10.15017/2339194

出版情報：史淵. 25, pp.1-15, 1941-03-31. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

ビスマルクの性格

長　壽　吉

藝術家的自由は、勿論歴史研究の上に許されない。事實に立脚することザハリヒであることは、あらゆる歴史學に要求される。ルネ＝ラヴァールがその歴史學の理論の上に說く所謂事象的個性と、人格的個性とのいづれに於ても、嚴正な事實の立脚は常に要求される。然し歴史を文藝することは、決して悉く歴史研究の上に禁ぜられてゐるものではない。事實を出發して構想に入り、そして事實に歸ることが、眞に研究の推輓でもあり、また事實上研究の過程でもある。如何に多くの業績が、歴史を文藝することに由つて、殊に佛蘭西史學の上に光彩を齎したかは、吾々の省みねばならぬところである。

史上の一性格に對して構想することは、性格といふ語のギリシヤ語原が示すが如く、彫刻することである。構想に由つて描出すべき藝術的技能を要求する。さればとてそれは單に「詩作」することではなく、また決して「藝術家の仕事のみで歴史家の仕事でない」（アドルフ＝フォン＝ハルナック）とばかりにも考へられない。むしろ歴史研究にとりて、重要な課題とも謂ひ得るのである。事實上歴史研究の力むべき一面は、史上の人格を、その人間としての姿に於て、凝視し構想し描出することである。あらゆる

その業績から、また政治的社會的地位から解放された姿に於て、人間として看ることである。ビスマルクについてのこの試みは、恐らく最も意義あり興趣あるものの一であらう。何となれば、歴史論著は褒貶ともに、餘りに多く彼の周邊を造り固めてしまつたからである。

一八九〇年代卽ちビスマルク退職の當時に於ける彼の業績の上の論評は、ワーゲナア『戰後のビスマルク』の如き無偏坡な有益な研究が却つて少く、皇帝との關係を中心としての興奮に類するもの多く、世界大戰前後に於ては感傷的な著作、例へば『ビスマルク吾等汝を呼ぶ』が如きものが多く、その後外交文書の逐時の發表に隨つて、ビスマルク外交策の研究が、ベッケル・ラハファール論爭の如きものから、ノアック・プレーン・グランフェルトなどに至るまで、專らその功業を稱し、全傳としてのルドウィヒ・マルクス・レンツ・マテ・エゲルハーフ・ブルム・クラインハティンゲンなどとともに、餘りに多くの周邊が、ビスマルク辭典の揭ぐる六百餘種を算して、宰相また新帝國建設者としてでなしに、唯そのまゝの人間としての接觸を却つて殆んど不可能ならしめんとしてゐる。この間、マイネッケの『プロイセンと獨逸―ビスマルク幼時』、リンケ『森園の老人』、レエベイン『ザクセンワルドのビスマルク』、リマン『退官後のビスマルク』などもあるが、これらもまた偉人景仰の前提を以つて、述べられたものに外ならない。

ビスマルク時代の歴史、またビスマルク事蹟の歴史を文藝することは、まづビスマルクを唯一個の人間として、制限されたる自由の範圍に於て、構想し描寫することである。巨大な政治家としてその業績

を恒に眼前にして彼を觀ることでなく、日常の生活の上に彼の性格を推定することである。斯くしてはじめて、彼の事蹟が、そして彼を生み彼を養ひ彼を成らしめた時勢が、更に彼の普國議會員として聯邦會議員として又外交官として宰相としての行實が、漸くにして知悉され來るであらう。惜しい哉このための文獻は意外に少い。爰には唯彼の書簡演説等に由つて、その僅かの一端を摸索するに過ぎない。「性格の疑問性」は、終にこの時代の巨人に、ザクセンワルドの老人につきまとつてゐるのである。

○

一八四六年十二月二十一日付書翰、ビスマルク三十一歳の時、ハインリヒ＝フォン＝プットカンマアに宛てたものは、彼の爲人を測知するに最も良き史料の一である。この日付の以前十四日に、彼はチンマアハウゼンに於て、後に彼の妻たるヨハンナ＝フォン＝プットカンマアとその母親とに會し、旅途ステティンのオテル＝ド＝プリュッスに於て求婚の書を送り、「何等の顧慮もなき率直さ」を以て、彼の宗教心、處生觀、また行動を述べたもので、理知的でもあり、また諦念的でもあり、一面には感傷的であり、ボヘミアン的でもあり、著しく浪曼的でもある。一八一五年以後に於ける獨逸青年の一般傾向、殊にブルシェンシャフト青年の傾向が、悉くこのうちに看取される。(Fuerst Bismarcks Briefe an seine Braut und Gattin, Hrsg. v. Fuerstin H. Bismarck. Erl. v. H. Kohl. Stutt. 1931. pp. 1—5.)

煩をさけず、この有益な史料の記述を、彼の性格の考察の指針として、こゝに摘出することとする。これより先き同年夏、ビスマルクはハアルツ山行を、親友モリッツ＝ブランケンブルグ及びその妻とども

に試み、その同行に又會話に、ヨハンナと面會してゐた。前掲書のホルスト＝コオルの解說に、この事が記してある。

この書簡に幼時の宗教々育を記した彼は、それが殆んど何等の了解をも彼に齎さなかつたことを記し十六歳にしてシュライエルマヘルの洗禮をうけたが、彼には唯專ら赤裸の汎神論的思想以外には何ものも無かつたと記し、彼の信念に於ては祈禱は神の本質に矛盾するものなる故に、彼は日日の祈禱を敢てしなかつたと告白してゐる。コオルの前掲書註解には、洗禮の聖語が、"Alles, was ihr tut, tut von Herzen, als dem Herrn und nicht den Menschen" とあることが對照される。十七歳ゲッティンゲン大學に入つたビスマルクは、「忽ち誘惑されるかと見れば、また誘惑者となつて、あらゆる種類の惡社會に出入した」のである。「古代哲學。理解しがたきヘーゲル論著、就中スピノザ、見たところ數理的明晰さのそれに心惹かれ」た彼は、これらに由つて、「人間の知性が把握し得ざるものに對する苦心に、落付きを與へられ」てゐたのである。如何にこの告白の諸點が、彼の性格の基礎に參照されること多き乎。これらは『思慮と追憶』には述べてゐないところであり、それが唯「公的」な範圍の覺書に外ならぬことを知らしめる。(Oto von Bismarck, Gedanken und Erinnerungen; H. Kohl, Wegweiser durch Bs. Ged. u. Erinnergn. I.p3. 1899.)

母を失つて鄉里に歸つたビスマルク。彼は母の慈愛にはぐくまれる年月を多く持たなかつた。大學入學後五年にして、一八三九年一月一日ビスマルクの母ルイゼ＝ウィルヘルミネは歿し、その歳復活祭の日

ベルンハルトとオットの兄弟はクニイプホフ領地の管理をはじめたのである。（Georg Schmidt, Schoenhausen und die Familie von Bismarck. Berl. 189. pp. 160–162）。「大きな忍耐と柔和」が病軀を堪え忍んだビスマルクの母、その死に向つて「涙を種まきて喜びの果のり」をまつ鰥夫の父カアル＝ウィルヘルム＝フェルディナントに對して、ビスマルクは「孤獨寂寞のうちに心境に變化を生じ」、「シトラウス・フォイエルバハの宗教觀に傾倒し」、「しかもその結果は。益々疑惑の袋小路に迷ひ込むのみであつた」と記してゐる。

「神は吾々の良心を通じて、宇宙の暗闇のうちの觸手を與へる」。「しかし聖書は何等啓示の力を與へない。余にとりてそれは、人間の手に成る書物に外ならない。それを讀むことは、唯徒らに新しき批判と疑惑との題材を與へるのみ」。「今は余の心を安める何ものもない。余の存在また世の人の存在は、目的もなければ用途もないものであらう。恐らくは、創造の偶々の序でのこぼれ出でに過ぎまい。生れ出でそして消えて行く、恰かも車輪の軋りに散る砂塵であらう。永遠といひ復活といふ、それは何ものでもない。人生、そこには何等の心を易くし、力を竭すべきもの全く無い」。

○

一八四四年五月、ビスマルクはポツダムの一公吏となつて勤務した。苦悶を職務の繁雜のうちに忘れ慰めんがためであると謂ふ。この頃兄ベルンハルトとその妻とは、病痾の數個月を送り、その妻は歿してゐた。これもビスマルクをして益々感傷的ならしめた。長兄アレクサンドル・フリィドリヒは二歳夭

折し、姉ルイゼ＝ヨハンナも五歳にして歿し、弟フランツは既に四歳にして不慮の傷のために死し、ただ末姉マルウィネ＝フランツィスカ（後のオスカア＝フォン＝アルニム夫人）が十七歳の少女であつた。(Georg Schmidt, ibid. kap 19. pp. 148, 166)。老父と對坐したビスマルクは、ルッソオの『告白記』の「二人して泣く」の心地であつたらう。

この父は翌年一八四五年十一月に歿して、「ジャン＝ジャックよ、母の思出を語らう」と言はなくなつた。そして恰かも一年後に、親友プランケンブルグの妻は、その母の死の看護に疲れて、熱病の床に不歸の客となつた。書翰の日付の一個月前である。その死の苦悶を眼前にしたビスマルクは、感動の餘無中になつて神に祈禱した。彼の心には「平靜ではないが、信頼と生存の意氣とが湧いた」。「神は許し給ふべし。日日祈ることに由つて、永遠の生命に對する疑惑を掃ひ得た」。「未曾つて知らなかつた涙を覺えつゝ」、「神の子として、悔恨の心を以つて、日日に神に祈禱をさゝげる」のであつた。

○

率直、感激的、篤信、そして浪曼的、これらはビスマルク性格のうちに、その青年時の鏤刻を強く且長く殘してしまつたであらう。餘り苦勞性でもなかつた父と、相當に理知的であつた母の育化は、ビスマルク幼時の事情で多く及ばずに、彼の十三歳の寫眞に見るやうな一面強固な意志と、一面感覺の強さとの性格が、前記の環境と、殊に浪曼思想の高潮時の影響とに、尖鋭さを增して行つたことが、この書簡の上によく窺はれるのである。

ハンノオフェル新聞紙上に、『全獨逸の立憲的政治生活』をダアルマンが書いたのは、ビスマルクがダアルマン教授のゲッティンゲン大學に入學したその歳、一八三二年の一月である。この有名な即ち當時の青年に大きな感動を與へた論著の後、一八三三年憲法の問題から、七教授事件（Dahlmann, Gervinus, Jacob u. Wilh. Grimm, Albrecht, Ewald, Weber）の紛亂は、果して『思慮と追憶』には詳でないが、學生ビスマルクに大きな感想を遺したものに相違ない。ダアルマンの政治意見が、國民議會の後年の「便宜性」以前の、純正な理想的なまた浪曼的であつたものは、青年ビスマルクに大きな影響を與へたであらう。更に、フリィドリヒ大王を追慕して、國民的感憤を、自邦主義の上に超越させたフィツアの詩は、ビスマルクもまた他の學生とともに愛誦したでもあつたらう。

「大學に入つてブルシェンシャフトに關係し、國民的感激を強烈にしてゐたビスマルクは、友人と、獨逸統一の理想の將來について睹をしてゐた。しかし彼には、ハンバッハ祝典（一八三二年五月二十七日）や、フランクフルト盲動（一八三三年四月三日）のやうな、無謀な喧燥を快しとは思はれない。少し冷めた自由思想的感激を抱いて、彼はベルリンに去つた。（H. Kohl, Wegweiser durch Ged. u. Erinergn. p. 18.）。ゲッティンゲン大學以來彼の思想は、かの書簡に率直に語られた宗教觀、處生觀と適應する性格の上の傾向である。彼自からが形容する "eher liberal als reaotionaer" である。（Gedanken und Erinnerungen. Bd. I. p. 14.）

○

私をして構想させるならば、彼の政治の理想は、獨逸の統一、而してこの統一は、ダアルマンの所謂合理的自由主義に由つて、國民總意の上に立つ立憲的王政の大同團結である。聯邦形態の傳統を無視せざる、聯邦の完成である。そしてこのための、普墺二重體制の合理的解決である。しかしながら、この理想に對して眼前に動もせば反對な現實を見る。時勢の下にそして境遇の間に、浪曼思想家であつたと思はれるビスマルクは、多くの世人の如き彷徨でもなく、躊躇でもなく、唯偏に整調である。彼の性格とそれから出る體度とは、理想と現實との整調の上に築かれる。しかもそれは單なる冷血でもなく、所謂鐵血の唯一路でもない。また整調は單なる便宜主義でもなく、又所謂卽物客觀政略でもない。

「政治に於ては、事實は獨自の感覺に對する好參考として評價されるべきではなく、唯獨自の感覺に利用されるべきである」と、嘗て彼は言つた。(R. Linde, Der Alte in Walde. p. 43)。感覺とはリンデも指摘するやうに、或一つの理想を包含するのである。朝暮その處を異にする如き、卽物客觀の現實追及に終始するものとは、同一視し得ない。本來の「感覺」は、ビスマルク性格の大きな特徵とも謂ひ得やう。この特徵の尖鋭したもの、むしろ歪められたものが、文化評論に於ける彼とウントホルスト博士との哩み合ひの事蹟にも、顧みられるのである。

○

有名な彼のオルミュッツ演說(一八五〇年十二月三日、普國議會)に於て、「大なる國家としての唯一健全なる基準は、國家的利己心に存在し、浪曼主義には存在しない」と彼は言つた。(Otto von Bismarck,

Die gesammelte Werke. Bb. X. p. 103)。この國家利己心とは、全獨逸本然の利害關係を考量し、普墺の適宜な調和を圖るべき、獨逸人としての感覺に由る理想の存在を謂つたものであつた。ビスマルクは普國の浪曼的自由主義者の計企を中心とする「獨逸聯合」が失敗に歸した結果、彼等自由主義者が墺國と一戰を交ゆべしとしたのを否定した。ビスマルクは諸小邦の間に開かれた「聯合會議」(一八五〇年三月)に於ても演說して、獨逸聯合計畫に反對し、偏狹な自邦主義を戒しめ、獨逸國民主義の理想を說いたのである。

所謂浪曼主義とは、獨逸聯合計畫の如き一時性の思ひ付き、或は單なる衝動に走つた憎惡の感が、あるべき理想を忘るゝに等しいものを指したのである。これを以つてビスマルクが結局は同樣に幻影を追つたものであると解することが不完全な判斷であると同樣に、「國家的利己心」を見て以つて、直ちに現實追及であるとするのは誤りである。彼は決して終始の現實主義者ではない。さう見るのは、彼の事蹟の表面から出發した餘りに行き過ぎた推定に外ならない。

一八四九年十月二十四日普國議會の代表の資格に關する討論の時に、彼は演說して、「理論は何等代表資格に必要なる根據ではない。要は本質的なもの、卽ち代表たる人の經驗の範圍である」と言つた。(Die ges. Werke. Bd. X. pp. 55–56)。この一語だけを見れば、妄に現實尊重のみであるやうに思はれる。然し彼は同演說中に同じ代表資格に關して、「獨自的であり、自省的であり、目的に向つての敎養のある」ことが必要であると述べてゐるのである。獨自的に胸中畫策あるべきこと、自省的に考量の深か

るべきこと、教養として理解の明かなるべきこと、結局は必然存在に對する理想の抱懷である。彼は理想を懷く。これに對して憧憬を深くする。然しそれは衝動や幻影とは類を異にする。そして理想を追ふがための深謀遠慮がこれに伴隨する。彼の政治意見は恆にこれを反映する。

○

帝國宰相としてビスマルクがとつた外交策を表面から見るものは、彼が理想を追つて左右迂回したことを看過し、（參照、Ulrich Noack, Bismarcks Friedenspolitik und das Problem des deutschen Machtverfalls. Lpz. 1928 は、この一面の缺陷を強調し過ぎてゐるが）彼の上に現實主義を規定し、また史上最大の機會主義者と形容し易いが、しかしこれは眞のビスマルク性格には何等の深い接觸もなく、唯事實に餘りに強い推定の地位を與へたものに外ならない。

「余を機會主義者と名づけるものがあるならば、余はむしろ甘んじてこの名稱をうけるであらう。さて何を意味するかと言へば、適當な機會に際し、それを有益に且目的に適ふやうに取扱ふことである。政治の要諦は實にこゝに存するのである」とは、文化評論の終末の頃、一八八七年四月二十一日、ビスマルクが帝國議會で演說したその一節である。（Die ges. Werke. Bd. XIII. p. 298）。彼の宗教政策が中央黨の權勢のために頓挫し、彼が法王に慰謝し、五月法の修正また一部撤去を說明したのに對する反對者の非難、殊に自由主義者の非難に應へた言葉である。彼が恐らく微笑を以つて言つたであらうことが想像される。

レッシングはラオコオンを批判しても、嘗てラオコオンを彫り出し得ることは自信しなかつたと云ふことを說きながら、彼は、「政治は人が學び得る知識ではない。それは藝術である。若しその才能なしとならば、やめる外はない」(一八八六年一月二十九日、帝國議會演說)と言つたことがある。(Die ges. Werke. Bd. XIII. p. 177)。描き出しうる藝術は、卽物客觀の現實追及ではない。

一面に於て、彼は、「ユンカア主義に對する一層の榮譽と威信」とを公言し、(一八五一年四月八日普國議會演說)(Die ges. Werke. Bd. X. p. 129)、またオルミュッツ演說に自由主義者を排斥して、「獨逸聯合計畫の赤き裏衣」を說き、(一八五〇年十二月三日普國議會演說)(Die ges. Werke Bd. X. p. 109)、ゴオタ會議(一八四九年六月三日—二十七日)の人々の自由改革說を否定し、更に普國議會に於けるシムソン・フィンケ等の自由思想の政治觀に、痛烈な批判を與へてゐる。

一面に於て彼は、一八五二年に保守派が强硬に主張した佛蘭西帝結婚否認を冷笑し、「勝手自由に結婚して可なり」と言ひ、(一八五三年一月二十七日ゲルラハ宛書簡)(Briefwechsel d. General Leopold von Gerlach mit Otto von Bismarck. Berl. 1893. p. 63.)、佛蘭西との友交を主張し、ナポレオン三世宛國王親書の mon frère, mon ami の問題(一八五三年一月二十八日ゲルラハ書簡)(Briefe d. Gen. L. v. Gerlach an O. v. Bismarck. Stutt. 1912. p. 34.)を看過し、Freund tant bien que mal を主張し、(前揭同ゲルラハ宛書簡)(Briefwechsel. p. 63.)、ボナパルティスムスの自由思想を無害なりと謂ひ、(一八五一年十二月二十五日ビスマルク書簡)(ibid. p. 12.)、「正義と革命」とを混同した自由主義者

たる評をうけ、（一八六〇年五月一日ゲルラハ書簡）(Briefe L. v. Gerl. an O. v. Bismarck. p. 229; Die ges. Werke. Bd. I. p. 286; Briefwechsel. p. 63. etc.)、ナポレオンと會見し、「獨逸のカヴール」となつてゐる。(Chester W. Clark, Franz Joseph and Bismarck. Camb. 1934. p. 125.)。

かゝる二方面が存したことは、決して六六年戰役前と七〇年戰役前とに、墺國及び佛國に對する現實打算からのみの計畫がビスマルクにあつたことと解すべきものではないことを、知らせるものであり、(Ulrich Hassel, Cavour und Bismarck; Arnold Oskar Meyer, B's Kampf mit Oesterreich; etc)、結局は「獨自的」であり「自省的」であり「教養」に由る理想が、彼の胸中深くかくれてゐたことを考へさせるのである。要は、彼の理想は獨逸の自由統一國民統一の完成した形の上に存したのである。一八五三年十一月二十五日書簡には、彼は繰返して全獨逸の融合を說き、(Briefwechsel. p. 117–121.)、六〇年代に入つて尙墺國との協和を希求した。前記マイエル著書には、六六年戰役直前も猶彼が墺國との協和を欲したことを記す。六九年に於ける三國同盟計畫とベヴァリヤの動向とが統一策に危機を生ずるに至つて、はじめて對佛蘭西策が決定された。

所謂打倒として現實的に見られるものは、實は理想と現實との整調の途に出た必然である。理想を追うて熱心な性格の一面の發露である。一八七九年獨墺同盟の由來に關して、「國民的感情」を問はれた時に、ビスマルクは之に答へずして「政治的必然」を强調してゐた。如何に彼が國民自由黨との提携を固くして、豫想に難くない文化諍論に猪突したか。如何に彼が排猶太運動を冷眼視して、大膽な寬容政

策を採用したか。如何に彼が普通選擧法を決定して、帝國議會の言論を擴大するを敢てしたか。如何に彼がヘエデル暗殺計畫を見て、未だノビリング暗殺事件が起らぬ先きに社會主義彈壓法を用意したか。

○

感傷的な性格の一面は、彼の不遇失意の時によく見られる。ウィントホルスト博士との啀み合ひが、文化諍論の彼の理想の遂行を猪突にまで推し進め、失敗の責任をファルク文相との嫉視に展開させ、對伊太利策の齟齬から發した嫌惡は、アルニム事件に發展した。ヴァルチン別莊に立てこもつて、憂憤に立ちも坐れもしなかつた彼は、カノッサ雪中の繪を掲げ、ルッタア事蹟を耽讀し、「余は既に三十六時間を眠らず終夜癇癪に堪へ得ず、頭は火爐のやうに熱して、云々」と言ひ、(Allgemeine Deutsche Biographie. Bd. 46. p. 133.)、しかも率直に、「中央黨の政治勢力に對抗するのが目的であつた。それを越したのは過りのもとである」と言ふ。(R. von Friesen, Erinnerungen aus meinem Leben. Bd. III. 284.)

「これ以上精魂を費したら、狂氣になるか、白痴となる」と、彼はアルニム夫人たる妹のマルウィネ＝フランツィスカへの私信に書いてゐた。(一八五九年六月二十九日)(Aus Bismarcks politischem Briefwechsel. p. 104.)。これは病中の苦腦と外交官生活の不滿とを述べた書簡である。『思慮と追憶』のうちにも彼はこの不滿を感傷的に記してゐる。そして頗る率直にローン將軍に宛てて(一八六二年七月十五日)不滿を述べ、「叢のかげにかくれてゐたい」と言ひ、「パリの塵を呼吸し、喫茶店劇場に欠伸して過すか、ベルリンに歸つて政治的ディレタントになるか。むしろ湯にでも入つて時の移るをまたう」と言つ

た。(Aus B's pol. Briefwechsel. p. 123.)。これ等は吾々に、直ちにさきのプットカンマア宛書簡の趣を思出させる。

○

「皇帝の命に由る軍隊を以つての送別の禮遇は、余にとりて正に最高級の葬式といふべきものである」と、皮肉に彼が記した退職隱居の日(一八九〇年三月二十九日)(Gedanken und Erinnerungen. Bd. III. p. 108.)から、彼は「フリィドリヒスルウの哲人」となつた。晩年の生涯は、また彼の性格を見るに參考となるところが多い。政治意見の對立懸隔とは謂ひながら、カイゼル＝ウィルヘルム二世との確執は、字義通り兩方ともに感情の鋭い關係の結果が、その一原因であるとは、誰人も考へ及ぼし得るのである。「最高級の葬式」とまで、ビスマルクは形容してゐるのである。

老境のビスマルクは、その壯年時から度々妻に宛てて歸家田園の樂しみを書簡に書いた通りの生活に入ることを得た。帝國宰相の繁勞から、ザクセン森園の綠蔭、小さき流れの清潺は、彼を安易ならしめたが、しかもバイロンを讀み、人生を cette nuit profonde et triste と形容し、悠々自適するが如くして、なほ眞の哲人として悟通し得ない焦慮感慨の人であつたやうに思はれる。リマンの『退職後のビスマルク』を見ると、或る詩人がビスマルクを訪ね、その性格の印象を記したものがある。「行動人としての鋭利な眼前のものを掴む力と、哲人としての先慮ある深い凄い遠望とが、驚くべく且つ忽ちにして交互する」。「猛烈な打ち込むやう實行力、容易に退かぬ强情、晴やかな諧謔、田舍言葉の氣輕さ、我意

の強い權勢心、胸襟をひらいた男性的信頼、深くひそむ怜悧、云々」と言つてゐる。所謂ビスマルク政策の疑問性（Ulrich Noack, op. cit）は、性格の疑問性ともなり得るであらう。

一八九八年七月三十日、ビスマルクはその長き生涯を終つた。ザクセン森園のうちの一丘上に、彼の廟が建てられ、その墓誌には、「皇帝ウィルヘルム一世の忠誠なる一獨逸人從者」と書いてある。それはウィルヘルム二世ではなかつた。テオドル＝フォンタネは一詩を詠じた。

Nicht in Dom oder Fuerstengruft,
Er ruh' in Gottes freier Luft.
Drauszen auf Berg und Halde.
Noch besser : tief, tief im Walde!
Widukind laedt ihn zu sich ein;
„Ein Sachse war er, drum ist er mein;
Im Sachsenwald soll er begraben sein!" etc.

昔シャルルマーニュの征討に、幾度か抗し幾度か敗られたサックス族の古英雄ウィドキンドの生涯に似て、理想を持せんとして幾度か現實に敗られた浪曼的なものは、ビスマルクの生涯であつたらうと思はれる。（Arthur Rehbein, Bismarck im Sachsenwald）（昭和十五年十一月三十日、退職記念講演）